



A 00  
竹 冷  
3

関白参上高野山  
修所法會

林燈補陀



年終多え

高野山

松

度ひうふ高野山

真山

新瑞大縁うふ高野山

白

光うふ高野山

常

高野山

常真



更にゆゑに秋に浮くは  
 桑江に一ひき余は  
 昂拂ひつゝ海をさけ 神  
 山道はふの下のふりさるる早  
 今春より久しき懐くもの  
 酒をく川名の毎や下す  
 明やふる水はもうみ  
 一糸の情をいさふ中  
 それに虹をよほす人

紹巳  
 家康  
 玄音  
 中山  
 大仰  
 大仰  
 利家  
 利家  
 田代  
 全宗

ふらふらと云うる者も、  
くさくさはれのつたうへ  
虫のこころをわきまを  
麻合するものなりや  
を知らぬ者もあらず  
ひろく麻は月のあかり入  
能や細くあらざる  
ほほ乃ちいふもの  
物に枕抱く夢を見て

雅伎  
由巴  
長連  
正宗  
長俊  
松  
尊山  
白  
冬

順うもゆる中ろれくも 家康  
 その家康平心よりいふ所 信巳  
 川をいひしを立列れぬる 友美  
 道行や道事と約なりて 玄音  
 清水を降かきしに清く 中大  
 柳をす柳の傍なり合 利蒙  
 柳をいひしをいふる 日大  
 かしこは移あるを移す 卯辰  
 戸ある所をいふる 卯辰

うま乃及多く入相まゝに 全宗  
 月をいふるに片まの神 雅村  
 柳をいふるに柳をいふ 松  
 やいやく成山風者 音  
 移くはまをいふる所を 西宗  
 移るはよりなみし所を 真山  
 実くはまをいふる所を 由巴  
 移るはまをいふる所を 多  
 移るはまをいふる所を 白

吾にならぬ道のゆゑに  
 方々の夜をゆく中より月まで  
 待たせしむる山おとこも  
 回もねえさうのなれきり  
 ひとよりあつたをいふと  
 化ぬしとあつたをいふと  
 おぼろしくもあつたは  
 日曜も月曜もれのまじり  
 あうね夜をゆくのか谷合

徳  
 思  
 日  
 雅  
 吾  
 考  
 松  
 考  
 全  
 宗

三

吾にならぬ道のゆゑに  
 まんが国もあつた  
 新乃衣を月よき  
 おてせぬのふれ一本  
 立並や秋のけしき  
 あつた人れ交  
 付いてあつた  
 明新れ  
 岡山あつた

康  
 由  
 巴  
 新  
 巴  
 新  
 巴  
 新  
 巴  
 新  
 巴

[illegible]

白

實

馬に引か  
せしむる

吳

歌を多し紫花は花より優りて

每

夏ハ月々に増えりて

2

小遊ハナハナハナハナハナ

名

賢下も白鳥初め是年より

利家

今乃ほかにさげぬをもち

征巴

[illegible]

けりてなまじきやうに

玄旨

新象生はる日るつて

風火

あ、ちやうど、さういふことだ。

卷五

五、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

五

少子

9

在...  
...  
...

人

五

15

藥材の常々集る所

1



姫と一と恒をくす糸 松

乃らる人より成りけり 金糸

小申のさかむ降の尻 張

色もぬくさきの花雪 白

まきようけりる 神代紙 青

青土呂 八分 仁徳院 本戸弼 口

木立上人 白山 五 里相違院 品叱 七 曲草次 全字 六

近衛左近将軍下

19

親王家 又

後田里信下 口

東陽寺 口

家康 口

信已 七

玄旨 七

中山信住 五

大御そ 六

利家 口

法眼 由巴 六

永春寺 雅枝 六

伊達 二宗 口

信田寺 長連 又

長俊 一

文禄二年四月二日

二月三日山寺より身山

上人住持に後家身より  
本寺より聖山寺兵衛より  
阿弥中書有るに格下は多し

夢客百負

天正十年五月廿四日

於岩山威徳院明智日向寺身行

何人

時令

光秀

天正十年五月廿四日

岩山威徳院の寺

行祐

花崗の寺に位を上げし

紹巴

同じ威徳院の寺に位を上げし

宿深

そも威徳院の寺に位を上げし

昌也

行祐の御多きを明なりお心前

字にこれよりお多きを明なりお心前

寺にこれよりお多きを明なりお心前

秋の兵庫に位を上げし

尾上のお多きを明なりお心前

立つてお多きを明なりお心前

けしきよりお多きを明なりお心前

僧侶の位を上げし

降りてお多きを明なりお心前



ものぞかしとてきやふつ  
いそしと藤くいと秋のそ  
な同きとふりやめおほ  
初もいふと音せき  
村竹乃後宮のしる  
きとけむとふはのき水  
響のや下あてねたき  
礼中いふとあやめ  
山月乃吹きとふは

巴 秀 前 七 巴 如 七 巴

聞てていふと揺りい  
曰くもきとふは  
い乃中いふとあや  
けふとふは  
思ひもなうに夜を明に  
舟もいふとあやめ  
正しとふは  
秋のそけむとふは  
山ハもいふとあやめ

巴 秀 前 七 巴 如 七 巴

下海にちしきりて  
 物もあらぬ世の  
 一海にちしきりて  
 おりかある事  
 海にちしきりて  
 とくてもはかばか  
 くりとけりて  
 こころもさる  
 けりともほい  
 前 如 比 祐 秀 巴 如 前

一節を月れ川水  
 おきかたきりて  
 夕まきりて  
 里遠るるも  
 枝もさきりて  
 赤もさきりて  
 尚もさきりて  
 賢もさきりて  
 列もさきりて  
 巴 前 比 祐 秀 巴 如 前

結ぶる秋今更にあらずに新なり  
 いとしうし海に雲をよむの月  
 寒くしほく氷のひやう  
 秋の夜ふかやきとてし  
 村をれ路なりも行く路て  
 来拂いつ人の跡を  
 宿とてしは路のたのしみ  
 山よりあやうしは路のたのしみ  
 秋の夜ふかやきとてし

秀 巴 比 巴 祐 如

東にけしきく行くきれ  
 ちあふしは同如くは  
 ちあふしは同如くは  
 村をれ路なりも行く路て  
 来拂いつ人の跡を  
 宿とてしは路のたのしみ  
 山よりあやうしは路のたのしみ  
 秋の夜ふかやきとてし

秀 巴 比 巴 祐 如

[illegible]

神子の新様たち  
 昌良もいさむ候なり  
 寺兄つともはなは  
 色も常し遊み近き花下  
 国くハヤ書家めり  
 老彦  
 心花十八  
 兼如十二  
 新彦十一  
 光彦一

